

飯沼賢司・新学長に聴く 「地域社会とこれからの別府大学」

今年4月1日、飯沼賢司教授（中世史、環境歴史学）が別府大学・第11代学長に就任します。そこで、今号では、篠藤明德・地域社会研究センター所長が、飯沼新学長に地域社会に対する思い、これからの別府大学に対する抱負を聴きました。

田舎への憧憬

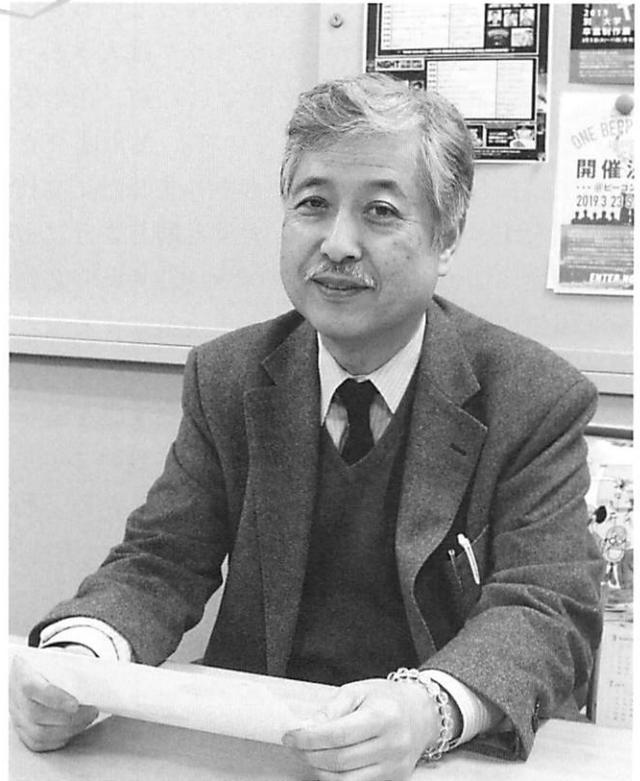
（篠藤所長）

私がドイツで生活していました時、飯沼先生のお名前を初めて聞きました。大学の同級生で、東京大学で教鞭をとっていた近藤成一君に、「別府大学には、飯沼さんという日本を代表する中世史の偉い先生がいる。そんな大学に君は就職できるのか？」と言われました（笑）。ポンの市庁舎の前です。それで初めてお会いした時、えらく緊張したことを覚えています。今では全く平気ですが（笑）。

さて、飯沼先生は、日本中世の荘園や家族の研究をしてこられました。また、中世の研究をベースに環境歴史学という新しい学問領域を切り開かれました。先生の研究を拝見すると、地域社会とは無縁に生きてるように見える現代人が、実は歴史的に形成されてきた地域社会と密接な関わりを持っていることに気づかされます。先生は、一貫して暮らしが営まれる地域に着目して研究をされてこられました。地域のどのようなところに魅力を感じていらっしゃるのでしょうか？

（飯沼学長）

僕は長野県の安曇野に生まれました。生まれたところは、安曇野のど真ん中にあり、周りには田



んぼが一面に広がっていて、北アルプスを見渡せるところでした。子どもの頃は、毎日、自然あふれる環境の中をかけずり回っていました。

そんなある日、気象庁の国家公務員だった父と一緒に東京に行くことになりました。僕が地域に魅力を感じるようになったのは、父の転勤でいろんなところを転々として過ごしたことが影響しているように思います。転勤族だったので、いわば根無し草でしたが、いつもどこかに子どもの頃のふるさとへの憧憬がある気がします。

小学校5年生の時に軽井沢に引っ越し、そこで4年間過ごしました。父は気象庁に勤めていたので、測候所や宿舎を転々と移っていくわけです。軽井沢は都会的な雰囲気を持っていたけれども、それでもまだ田舎的な雰囲気がありました。

ですが、中学校2年生の終わり頃に父の転勤のため東京に出て行くことになりました。田舎暮ら

しをしてきた人間でしたので、都会の東京にはショックを受けました。「水がまずいところだな」というのもショックでした（笑）。東京に来るとすぐに高校受験があり、小石川高校に入学しました。高校は文京区にあり、東京大学もすぐそばにあるわけです。学校では成績は一番でしたが、都会に慣れていなかったし、実力も伴っているわけではありませんでしたから、ショックは大きかったですね。高校は自由な校風でしたが、70年安保、学生運動の影響を受けていて、大衆団交といって校長とわたりあうこともありました。高校も改革をすべきだと言って、大学と同じようにゼミを行えるようにする、そのために100単位必修を80単位にして残り20単位は選択授業にするなどの改革をやりました。だから3年生の時に4限が終わって午後は選択授業。そこで近代文学を1年間かけて少人数ゼミで読んだり、日本橋のフィルムセンターに通って映画批評もやりましたね。わけわかんないことをやっていたんですね（笑）。でも高校の先生には芥川賞候補になる先生がいて、非常にレベルが高かったのを覚えています。だから、大学に入学すると、大学生はこんなにレベルが低いのかと驚きました（笑）。

でも、こんな風だったから大学受験に受かるはずがない（笑）。同級生もほとんど全員討ち死にして予備校生活でした。プライド高くて実力は伴わなかったんで、浪人しました。早稲田大学文学部に進学するんですが、「文学部」しか決まっていなくて、何がやりたいかは定まっていませんでした。ただ、昔から漠然と歴史はやりたいと思っていたんです。

子どもの頃は、鉱物ハンマーをもって山を歩き、化石や鉱物を集めるのが大好きだったんです。これは父の影響ですね。父も鉱物標本を集める趣味を持っていました。それを見ながら、鉱物を集めていました。

また、何となくですが教師にもなりたいたいと思っていた。その気持ちの原点は「離島の教師」への憧れです。なにか「灯台守」みたいな感じが大好きでね、「おいら岬の灯台守は♪」みたいな（笑）。これも多分、父親が田舎にある測候所で仕事をしていたことの影響だと思います。

かつて僕は田舎の人間だったんだけど、その後大都会の東京に出てきて、自分の中の根っこがどこかわからなくなってきていたんです。戻る場がどこだろうと自分に問いかけてみたときに、何処というわけではないけれども田舎の風景として浮かんできて、そこへのこだわりがあって、教員を目指したんです。それで東京都の高校教員試験を受けて、校長面接も受けてほとんど受かると思っていたら、落ちちゃった（笑）。どこか、自分の人生は最後に落ちて新しい展開があるんですよ（笑）。それで行き場所がなくて大学院に行きました。まるで神様がいて、最後は「こっちに行け」というように進路を変えちゃうみたいな（笑）。

そして、早稲田大学の大学院にいた頃に、「大分に行かないか」と話をもらったんです。当時、大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館（現大分県立歴史博物館）の研究員で、宇佐神宮の荘園だった田染荘たしみのしょうの研究をしていた海老澤衷さんが早稲田大学に戻ってくることになりました。それでポストが空いたから行かないか、と声がかかったわけです。声がかかったのは二人いて、一人は僕、そしてもう一人が別府大学史学文化財学科の田村さん。田村さんは断り、僕が大分に行くことになりました。

僕は田舎に行きたいと思っていたんだけど、学者としては島流しのような気がして、東京から離れて大丈夫だろうかとか焦る気持ちはありました。でも、地方の田舎にこだわって、都会の研究者に負けられないような研究業績をつくりたいという野心想いたものもありました。そんな思いを持って大分に来て、博物館に6年間勤めました。



人間の自然との付き合い方が地域を形作る

もともとの研究テーマは「荘園と家」
（篠藤所長）

飯沼学長の地域へのこだわりというか、心のふるさととして「田舎」があったんですね。そこで、まさに東京から見れば地方であり、田舎である大分に来られたわけですが、そこで環境歴史学という新しい学問領域を切り開かれましたね。大分と

いう地域とどう関わり、地域をどのように見てこられたのでしょうか？

(飯沼学長)

環境歴史学は大分に来たばかりの頃は全く考えていませんでした。当時の僕は、中世の荘園について研究をしていました。荘園研究というと、石母田正が戦時下に執筆した「中世的世界の形成」があります。これは小さな田舎を丹念に調査研究して普遍的な中世の世界観をつくったもので、僕もこうした研究に憧れていました。卒論は石母田の「中世的世界の形成」で舞台となった伊賀国黒田荘の研究でした。そこから発展して大学院では、荘園制の骨組みというべき「職しきの体系（重層的に荘園を支配する荘官・領家・本家のそれぞれが保有する収益権利と職能権限が結合した体系）」について研究し、修士論文を書きました。

簡単にいうと、この時代にできた「職」は官職でもあるんですが、私的な財産でもあり、自分の子どもに譲ることができるようになるわけです。支配や相伝をより確かなものにするために、荘園の支配者達は中央の有力者と結びつきを強めていき、地方と中央の関係がつくられてくるんですが、そこに「家（制度）」ができるわけです。

僕は荘園を通じて日本の「家」がどのようにできたかを研究をしていたんです。特に、家では女性の役割が重要でしたから、女性史もやっていたし、名前の研究もしていました。こうした研究をやっていて、大分の国東でふたたび荘園の研究をやることになったんです。国東半島荘園村落遺跡詳細分布調査というのが当時担当していた研究調査事業です。

家や名前の研究をやっていたので、村々の家にこだわりながらフィールドワークをしていました。前任者の海老澤さんとは違う視点で歩いていました。村落そのものというより村落の中の各家に注目していたわけです。なぜかというと、当時すでに有名になっていた国東半島の田染たしづのしやう荘で、圃場整備事業が行われることになったからです。これによって田んぼや家々のあり方が大きく変わってしまうので、村々の記録をどうやって残すかということで家の研究をしていました。当時

は、自分の研究視点に引きつけて、村の調査をしていたんです。

地域の暮らしの中に息づく歴史の魅力

僕は大きに赴任してすぐ、田染の隣の都甲とこうという地区の荘園村落遺跡調査を担当し、調査委員の歴史研究の大先生達を案内することになりました。全然知らない場所を、大きに来て一月も経たない人間が説明するのは大変でした（笑）。ですので、案内のための事前調査は一応しましたが、当日の説明はにわか仕立てでエイヤーの勢いでしました。その後は都甲地区をすみからすみまで歩き尽くしました。地域に昔から住んでいる人を訪ね歩き、古い歴史資料を見せてもらいながら、地名や昔話をずっと聴いて回りました。

ですが博物館に勤めると自分の研究だけやるという訳にはいきません。初めて発掘をやることになりました。実は昔、僕は考古学に疑いを持っていました。文献調査をやっている僕から見ると「穴なんか掘って何がわかるんだろ」と（笑）。そこで、発掘の現場で、考古学をやっている人たちと一緒に土運びや測量などをやりながら、耳学問と多少の体験で考古学を習いました。そうして、初めて「考古学の方法論ってこうなんだ」とわかってきたわけです。

僕はこの博物館で大事なことに気づきました。博物館に行くと、考古学をやっている人、民俗学をやっている人、美術史をやっている人、保存科学をやっている人、そして僕みたいに文献をやっている人、さらに地理学や近世史をやっている人、様々な専門家がいます。僕が勤めた博物館にはいろんな人がいて、一緒に作業して、一緒に昼飯を喰いながらいろいろと議論する場があったんです。大学だと自分の研究領域だけかたまってしまっただけで、博物館では、いろんな研究に触れて耳学問ができるんです。

博物館勤めで僕は、いろんな話を聞いたことがとても役に立ちました。そうして、次第に僕は「何も知らない人の知識が一番重要だ」と確信するようになりました。学校の先生の知識は余分な知識を集めて、自分のストーリーで話をしてしまう。そんな知識はいらないんです。本当の知識

は、昔からの伝承をそのまま語ってくれていることなんです。例えば、90才を過ぎたおじいさんが「いや、昔、私の隣の家に足軽がおってね」とか言う。こちらとしては「えっ、足軽って江戸時代だろ?」となる。でも、おじいさんが子どもだった明治時代には足軽だった人は実際に生きていたわけです。おじいさんの中に歴史が息づいていて、私たちはその歴史を生で聴けるわけです。それは、文献には書かれていないんですね。そんな生活実感をとまなう生きた言葉や地名を辿っていくと、例えば鎌倉時代とつながる発見があったりするんです。歴史書にも書いていない。鎌倉時代に言われていたことが、今に至るまで伝わっているんだということに驚きます。

僕にとって地域の面白さというのは、地域に生きている人たちにとって普段の暮らしの中で昔からのものを受け継いでいくことが生きるエネルギーになっているというか、暮らしの中に息づいている歴史を発見する面白さなんですね。役場の資料は定まったもの。でも、地域のお年寄りの中にはそこには書かれていない新しい事実がある。例えば、財前さんの墓が鎌倉時代から連綿とつながっていく世界があってびっくりするんです。「国東っていったいなんだ」と。国東でそんなふうに地域の面白さを感じるようになりました。

圃場整備との闘い

国東では様々な人と出会いました。現在の豊後高田市市長の佐々木敏夫さん、昭和の町を金谷俊樹さんとともに作り上げてきた前豊後高田市市長の永松博文さんとも出会いました。私が大分に来た頃の国東は、金谷さんがおっしゃっていたように「商店街に猫と犬しか歩いていない」衰退が著しい地域でした。だから、圃場整備で地域が再生できるんじゃないか、再生させようと思う人が多かったんです。

でも、日本の実情に照らすと圃場整備はうまくいかないものだったんです。山間地では田んぼがつぶれていく一方、圃場整備が行われようとしていた時に、僕たちは村の歴史を「記録」としてどう残していくかを考えていたんですね。僕は海老澤さんの後任として調査をしていただけで、なぜ

圃場整備が行われるのかなんて、初めはまったく分かっていなかったんです。

でも、地域に入り続けていくと、次第に国東にどういう問題があるのか分かってきました。さらに、自分の暮らしていた安曇野の田んぼの景色も圃場整備によって変わっていて、全国的に同じ問題を抱えていることがわかってきました。すると、我々にとって田舎や田舎の風景っていったい何なんだろうと考えさせられたわけです。

(篠藤所長)

今話を聞きながら、大分に来て歴史研究を始めた頃の想いや研究スタイルがどう変わっていくのかがよく分かりました。博物館で共に働いた仲間との出会い、国東の地域に入っていく中で出会った古老との出会い、そして国東の問題とその問題解決をしようとする人との出会いを通じて、飯沼学長の研究のあり方、地域を見る観点や地域と関わる研究者の姿勢が大きく変化してきたんですね。とても興味深く聴かせていただきました。

お話に出てきた金谷さんも、ご自分の生きてきた昭和という歴史を一つ一つ丁寧に磨いていって仲間を増やして、昭和の町というとても大きなものをつくられました。

飯沼学長と金谷さんの取り組みには共通点があるように思います。二つのベクトルがあって、一つは圃場整備や集落営農や企業化、つまり経済の合理性を追求して活性化しようとするベクトルで、とても強いです。ところが一方には、昭和の町や田染荘のように地域の歴史に根ざしていくことで活性化していこうとするベクトルがあります。このアンビバレントなベクトルがあることについて、飯沼学長はどのようなお考えをお持ちでしょうか。

(飯沼学長)

僕も悩みました。田んぼは過疎化・高齢化が進むと誰も担い手がなくなってしまいます。そこで政府は大規模化をめざしました。でも耕地は大規模化できても、水路をとまなう水田は難しいんです。水田と水路は地域共同体で維持して行かざるを得ないからです。小さな田んぼでは大型機械

が入りませんから少しずつ作業をせざるを得なくて、沢山の人手が必要になります。大規模で少数でやるようにすると、逆に人手が少なくなる。すると水路が維持できません。水路の維持と地域の共同体は不可分なんです。祭礼もそうですね。

日本の農家はそもそも専業ではありませんでした。兼業で他の仕事もやっていました。そこに専業化、大規模化を目指していくことで地域が壊れていったんです。今、農村で会社化がはかられています。地域の再生ということでやるならばわかりますが…。どちらのベクトルが良いのか、それは今でも難しい問題だと思います。

ここに環境問題が結びついてきます。環境というと、圃場整備した田んぼとしていない田んぼを比較すると生物多様性に大きな違いが出てきます。調査を進めていくと、人間が自然にどう向き合ってきたのかが、地域社会の大きなポイントとしてあることがわかってきたんです。

環境歴史学については、初めからそんなことは考えていませんでした。ところが、あるときに、私たちは自然とどう付き合ってきたのかということが地域を形作っていることに気づいたんですね。例えばそれは水の利用の仕方や、四季に応じた暮らしの智慧や工夫などです。里山はまさに人と自然の相互作用で絶妙なバランスを保っていますが、そのことによって、長年にわたって共同体を維持してきました。

圃場整備のような大規模開発か、それとも今までどおりに昔ながらのやり方かという二つの矛盾するベクトルの問題ですが、僕はそこに「自然と人間がどう関わってきたのか」という視点を持ち込むことが大事だと思っています。

ただ、これはあくまで学問的な関心から大事だと思っているんです。歴史学、特に家族史をするマルクス・エンゲルスの理論から入るんですよ。ですが、だんだんそれでは問題は解決しないことがわかってきます。自分の前にある国東の問題を通して、そのことを肌身で感じました。国東という地域は、歴史学や家族史研究の限界を乗り越えるヒントを与えてくれる格好の場所だったのです。

それが1990年代の初頭でした。そこから、環境

問題や里山論が出てきて、90年代の半ばに、僕は環境歴史学を考えていくことになりました。

● 学生を地域で育てる意味とは

(篠藤所長)

飯沼学長が研究者として地域をどうとらえてこられたか、大変興味深いお話を聴かせていただきました。

ところで、ここからは、大学についてのお話をさせていただきますと思います。先程、圃場整備や集落営農や企業化、経済の合理性を追求して活性化しようとするベクトルの話をしましたが、これは人材養成の役割を担っている学校教育制度とつながっています。

学校は知識の教授によって分業社会に応じた専門家を養成し、その後に企業社会が吸収します。そういう大きなシステムがあり、大学は非常に大きな機能を担っています。

そういうとき、歴史が息づく自然や人間の暮らしを守っていくという人材と、分業化された社会で専門家として貨幣を稼ぐ人材と、この両方の人材養成についてはどうお考えでしょうか。

今、別府大学は、「地域に出かけて学生を育てよう」と言っています。文科省も言っていますよね。ただ、そこでの地域との関わりは「専門的知識を育てるため」だと言われます。それは共同体の一員として問題を分かち合うような地域との関わり方ではないわけです。飯沼学長は、学生を地域で育てるということの意味をどうお考えでしょうか。

(飯沼学長)

僕はそう大上段に考えたことはありません。自分の経験の延長で考えてみたいと思っています。僕は、地域に育ててもらったと思っています。大分の中でいろいろな経験をさせていただいたとは思っていません。おっちゃん、おばちゃんの話、泥に入って田植えをする、一緒に飯を食べる、五感もフルに使って考える体験をすることがとても大事だと思っています。それで僕は最初の狭い考え方がもまれ、広げてもらいました。

地域というとき、それは田舎でなく都会であってもいいんです。地域の人たちと一緒に何かやってみて考える、そんな機会として別府大学の地域連携推進センターにはこだわっています。今年、同じ地域連携推進センター委員の先生と一緒に竹田市に入りました。教員として使命感がないわけではないのですが、基本的に教員自身が地域に入ることが好きだからです。学生に教えるとかそんな高邁な考えを持っているわけではない。面白そうだからなんです。それで十分だと思っています。そうすると、自分に返ってくるものがたくさんあります。そうして地域で学生は成長すると思うんです。

地域の人はずっと楽しいばかりではなく苦悩されています。「過疎を何とかしたい」と悩みに悩んでいる姿に接して、「自分は何ができるのか」、「どう生きるのか」を考えるし、考えてほしいと思っています。

また、学生にとっては、人生で初めての経験をいっぱいすることになります。見たこともない景色、はじめてさわる物、はじめて出会う人、いろいろあるでしょう。そんなものをいっぱい経験させてあげたいと思います。それが大学と地域の連携につながってくると思います。

(篠藤所長)

そういう大学教育ができるといいですね。ただ、今の話はあくまで飯沼学長個人のお話です。別府大学全体では、どのくらい積極的に地域に出かけていこうとする教職員がいるのでしょうか。

(飯沼学長)

結構いますよ(笑)。前はとても少ないと思っていました。でも今は、結構増えてきたと感じています。例えば、国際言語文化学科の芸術系コースの先生です。外部にいる者から見ると、昔の芸術系コースは、地域と関わりをもち、何かに取り組むことは少ないと感じていました。ですが、近年は、別府大学駅に大きなデザインを描いたり、日田市の天瀬公民館の玄関の絵を描いたり、驚くほど精力的に地域に関わられています。

「これは私の仕事である」というレベルではな

く、「私は楽しんでやっている」というレベルで地域に関わっている先生が着実に増えてきていると思いますね。これは新しい別府大学をつくっていく上でとても大事だと思います。面白がって学生と地域に出かけていく教職員が増えてくれば、私たち年寄りも安心して死ねる(笑)。実は、僕は「僕らの世代がいなくなったら、こいつら(年下の教職員)どうしようもなくなるんじゃないか」「俺がこれだけやっているのに、皆ついてこない」という話をしたことがあったんです(苦笑)。でも、逆に僕らが若い人にプレッシャーをかけ、芽をつぶしたところもあると思うんです。

学生と地域に出かけていったことがない教職員は、おそらく地域に出かけていく面白さに気がついていないだけではないかと思うんです。楽しみを感じれば、時間がなくても出かけていくと思います。僕なんか、地域に出かけて行って、適当に楽しんでいる(笑)。



世界はローカルだ

(篠藤所長)

そうですね。結構いますよね。学生にもいます。共同温泉に入っている学生たち、そうそう「温泉愛好会」。

(飯沼学長)

そういうことですよ。そしてそれをつなげていくんです。別府大学と言えば温泉大学であるわけだから、以前から「風呂をつくろうよ」とかいう話があるんです。一緒に風呂をつくって、風呂に入り、ついでに学長も一緒に入る(笑)。そんな大学があるんだったら、それはそれでいいのではないかと思います。

別府大学にはいろんな学生がいます。知識的に優れた学生もいるけども、多くは優れている訳ではありません。さらに人生の大きな問題を抱えていて苦しんでいる学生もいます。彼ら一人一人に向き合ってどんなことができるのかを考えていくことが必要だと思います。もちろん、何でもかんでもできるわけではありません。学生が何か興味のあることに取り組み、元気になっていける仕掛

けがこれからの別府大学に必要なだと考えています。

地域でどんどんやっているると最後には世界につながるのでよね。世界というけど、結局はローカルなんですよ。例えば、グローバルとかフランスのパリとかいうと、自分たちから遠い世界だと思っちゃうけど、結局は田舎なんですよ（笑）。向こうの人間が考えていることは、別に高尚なことではないし、僕たちと同じようなことを考え、悩んでいるんです。付き合ってみると、だんだん親しみを感じて、自分たちと変わらない、分け隔てなく考えることができるんですよ。言葉の壁はあるけど、気持ちの壁はなくなっていく。

僕らは宇佐や中津で条里地割が残る田んぼの水路を調べていました。それをフランス人の前で話したら、ローマの耕地制度とつながっているなんて言いました。「宇佐がどうしてローマの耕地とつながるんだ？」と僕は思っていたわけです（笑）。でも、フランス人から見れば、何の変哲もない田んぼが、「ローマの耕地の様式（ケントゥリアと共通する制度）が日本の水田で生きている！千数百年の時を経ても生き続けているなんてすごい」とか映るんですよ。ローカルなこと同士が繋がって、こっちが驚いたんだけど、それで論文書ければ気楽な話ではないかと（笑）。

（篠藤所長）

マネーは世界で通用するから万能で、ローカルなものではなく、グローバルなものです。ところが、人間の生活やその人にとって意味のある空間というのは、直に触れられるもの、歴史的なものなどが織り混ざって出来上がっているからこそローカルです。「世界はローカルだ」というのも当然だと思います。

マネーの数値だけを追っている人は、世界をマネーそのものあるいはマネーが広がるグローバルなものとしてとらえています。けれども、本当の世界はローカルであり、ローカルとローカルがつながることで見えてくるんですね。とても納得のいくお話でした。

そうすると、別府大学の意味は、マネーから解放されて、個人や地域の意味世界とつながる、

ローカルとローカルがつながることで世界理解ができる大学ということになりますね。それは良いですね（笑）。

（飯沼学長）

観光も同様です。田舎の暮らしの中にあるものに魅力を感じ合っているんですよ。そう考えると、どれくらい地についたものを考えていけるかが大事になってくる。ローマと日本をつなぐというのは、実は非常にローカルなものをつなぐということなんです。本当につながっているのかという議論ができるんです。それで、今年もフランスから4～5名の先生方が別府大学にやってきます。篠藤先生、ぜひ、彼らに「日本の水田のどこに魅力を感じているんだ」って聴いてやってほしいですね。

別の話になりますが、ローカル新聞である大分合同新聞にもぜひ追いかけてほしいと思っているんです。ローカル新聞であれば、ローカルがどう世界につながるのかを見届けてほしい（笑）。すでに伝えて、興味を持ってもらっていますが…。



これから別府大学が目指すもの

（篠藤所長）

別府大学は小さな大学ですが、地域と関わり世界とつながる教育研究ができることがわかりました。一方で、専門的な面でも地域に貢献できる力を持った大学だと思っています。最後に、別府大学が目指していく方向について、新学長のお考えを聞かせて下さい。

（飯沼学長）

私は、目指すべき大学像として次の三つを挙げました。(1)「学生・教職員が誇れる大学」、(2)「学生・教職員がワクワクし、ともに未来を語れる大学」、そうならば(3)「入学したくなる大学」になるだろうと考えています。

そうした大学をつくっていくために、私はぜひともやってみたいことがあるんです。その一つ目は、建学の精神「真理はわれらを自由する」を教職員、学生で語り合い、自分なりの考えをもてる

ようになることです。それは、自分の発見、さらに一人一人の特性を生かせることにつながり、共に教え合う教育の実現につながると考えています。まず、教員が、佐藤義詮記念館の展示室で学んで、建学の精神について説明ができるようになる(笑)。もちろん、自分なりの解釈でいいんです。自分が勤めている別府大学の歴代の先生達にはどのような人がいたのか、またどんな学生達がいる、どのように別府大学を想っていたのかを知って、考えてほしいんです。

二つ目は、先程お話ししたように、地域と共に生き、別府・大分という地域特性を生かし、日本のみならず世界に発信していくような大学になればいいなと考えています。

三つ目は、大学に内在しているけれども我々が気づいていない原石を見つけ出し、磨きをかけることです。それは、教職員かもしれないし学生かもしれない。本人も気づいていないかもしれません。一人一人が何を活かせるか、一人一人に合わせた磨き方を考えていくと、どこにも引けをとらない大学の特色、ブランド力を作り上げることにつながると考えています。

四つ目は、社会の多様性(ダイバーシティ)に対応できる大学をつくることです。「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン」(平成30年11月中教審答申)は、国連のSDGsの「誰ひとり取り残さない」という理念を2040年のあるべき社会改革の方向の一端として示し、「多様性」に対する柔軟な教育的対応を求めています。別府大学にはいろいろな学生がいます。本学も学生の特性に合わせた多様な教育を確立していく必要があると考えています。

五つ目は、経営的にはスリムな大学をつくる必要があると考えています。

大まかには、今述べた5つに取り組んでいくのですが、具体的な戦略は他にたくさんあります。その概要は、次の通りです。たくさんありますが、しっかりと教職員や学生同士で議論しながら、新しい別府大学をつくっていきたいと思っています。

○大学評価に向けて万全の準備を行い、その後の

将来構想を練る。

- 中期計画の達成目標を実現する。
- 学生と教職員が建学の精神と大学の歴史を知り、大学に誇りを持てるようにする。
- 国際経営学部を中心に別府大学全体の観光戦略を練る
- 人間関係学科が福祉の街別府の特性を活かして福祉の大学ブランドづくりに取り組む
- 歴史・文化財学科の研究ブランディング事業の継続と展開
- 英語・英米文学コースと教養英語の改革
- 短大と大学が連携し、小学校教員を養成する
- 食物栄養科学部と発酵食品学科の新展開を練る
- 学部への長期履修制度導入-ゆっくり学ぶことが必要な学生への配慮-
- 留学生教育と国内就職への積極的対応
- 社会人、退職者、高齢者が求める社会人プログラムの創設
- 実質就職率の向上を図る。
- 大学院の改革
- 学内の各部署と連携した広報戦略
- 大学の魅力や学科のブランド力を効果的にアピールする募集戦略

(篠藤所長)

今日は、新しい別府大学の方向についてとてもワクワクするお話を伺うことができました。ありがとうございました。